

学習論として見た「身体感性論」の意義と可能性

— R. Shusterman の所論をめぐって —

樋口 聡

(2002年9月30日受理)

A Significance and Capability of “Somaesthetics” from the Viewpoint of Learning Theory

— A Commentary on R. Shusterman’s Article —

Satoshi Higuchi

This paper examines Richard Shusterman’s “Somaesthetics and Education” from the viewpoint of learning theory. The points of the discussion are: (1) what is somaesthetics?, (2) three fundamental dimensions of somaesthetics, (3) educational value of practical somaesthetics, (4) somaesthetic exercise and school curriculum. Significance and capability of somaesthetics would be considered in three aspects in terms of the problems of learning and education: (1) rethinking the pragmatism in education, (2) new framework of the relationship between theory and practice, and (3) reconsidering the dualistic scheme of mind and body.

Key words: Somaesthetics, Pragmatism, Feldenkrais Method

キーワード：身体感性論，プラグマティズム，フェルデンクライス・メソッド

本論文は、リチャード・シュスターマンの論文「身体感性論と教育」¹⁾を取り上げ、学習論という視点からコメントを付すものである。まず、シュスターマンの言う「身体感性論」とはいかなるものか、それを明らかにしよう。

I. 「身体感性論」とは何か

シュスターマンは、この論文の最初の部分で、身体感性論についての簡単な定義を示す。ここで「身体感性論」と訳されているのは、somaesthetics という英語である。身体を表すギリシア語 soma と、aesthetics を合成して作られた言葉である。aesthetics は通常「美学」と訳されるが、シュスターマンの言う somaesthetics の内容を考慮すれば、aesthetics は、そのもともとの意味であるアイステーシスに基づき「感性論」と捉えられるべきである。シュスターマンによれば、身体感性論とは、身体の実験と使用についての批判的、改良主義的研究を行なう一つの学問である。

改良主義的研究 (ameliorative study) とは何か。

それは、端的に、身体をより良いものへと変えていくことを意味している。その場合の「より良い身体」とは必ずしも自明のことからではないが、さしあたってシュスターマンが例示するのは、鋭敏な感覚を持った身体、感覚の機能が高められた身体である。

身体感性論は、それが成立する前提として、身体を感性的受容 (アイステーシス) と創造的自己形成の場と捉える。したがって、身体感性論は、身体への配慮を構造化し、身体への配慮を改良することを可能にする知識、言説、実践、身体訓練に関わっている。ここでわれわれに違和感を与えるのは、身体感性論という学問が、身体への配慮に関する知識や言説を問題化するだけでなく、身体をめぐる実践や、さらには身体への配慮を改良する身体訓練にまで関与するという見方である。この見方の背後には、学問に対する従来の通念とは異なる見識がある。シュスターマンの場合、その学問は「哲学」である。シュスターマンは、改めて哲学の「課題」を振り返っている。

知識は感覚的知覚に依拠している。そして感覚は身体に属す。これが、シュスターマンの基本的な出発点

である。哲学は感覚的知覚の信頼性に問題を見て、感覚に対する批判を企ててきたが、それは言説分析のレベルであり、われわれの世界認識を形成する基本に知覚の正確さと広さがなければならない、とシュスターマンは言う。これが哲学の課題反省の第一のポイントである。

また、第二のポイントとして、自己を知ることが哲学の主要な課題であるとすれば、身体的次元の知が考慮に入れられるべきである、とシュスターマンは言う。身体感性論は、感情の気づきを改良することに関わっているものであり、それによって身体=自己を知ることになるからである。

哲学の課題反省の第三ポイントは、「知」と「効果的な意志」の両者を求める「正しい行為」であり、われわれの行為は身体によってなされ、意志の力は身体の働きに依存する、とシュスターマンは言う。身体的経験を洗練させることによって、われわれの意志がいかに働くのかをより良く知ることができる。つまり、倫理的な意味での正しい行為でさえ、自分が正しい行為を行なっていることを認知し、意志を適切に行為に結び付けるのは身体的経験によってであると、シュスターマンは言うのである。

そして、第四のポイント。哲学が幸福とより良い生き方の追求に関わるのであるとするならば、身体感性論が快樂の場所と媒体として身体を捉えることは、哲学的にもっと注目されるべきだろうとシュスターマンは言う。われわれ人間にとっては、純粹思惟の快樂といったものでさえ具現（身体）化するのであり、その快樂は、より良いものとされた身体的な気づきと訓練を通して、強められ、楽しさという特性が付与される。また、身体感性論は、正義への政治哲学的関心にも寄与するという。身体感性論は、権力の複合的な階層がいかに維持されるのかについての一つの理解を与える。支配のイデオロギーは、身体的な規範すなわち身体的な習慣に記号化されることによって、暗黙のうちに保存される。しかし、抑圧的な権力関係は身体に記号化されているがゆえに、それらは別の身体的実践によって変化させられる可能性を持つ。この点において、シュスターマンは、フーコー、ライヒ、その他の身体療法家の間に共通点を見出し、身体実践への体系的なまなざしと、その実践を変化させていくことは、より大きな自己制御のための方法となりうると述べているのである。

II. 身体感性論の三つの基本的次元

身体感性論は三つの基本的次元を持っている。

シュスターマンの記述をまとめてみよう。

第一の次元は、分析的な身体感性論 (analytic somaesthetics) である。それは、われわれの知識と実在構成における身体的な知覚と実践の基本特性を明らかにする、身体についての存在論的・認識論的問題を含む。また、フーコーに見られるような社会政治学的研究も含む。

第二の次元は、プラグマティックな身体感性論 (pragmatic somaesthetics) である。身体を改良する方法とそれらの比較研究の次元である。人類の歴史の中で身体の経験と使用を改良しようとする多くの方法があるが、それらは、「表象的なもの」と「経験的なもの」に分けられる。前者は外見的な見栄えを強調し、後者は経験の質を強調する。整形美容は前者の、禪の瞑想やフェルデンクライス身体訓練法は後者の典型的な例である。

第三の次元は、実践的な身体感性論 (practical somaesthetics) である。これは実際の実践のレベルである。身体感性論は理論であると同時に実践でもあり、実際の身体的パフォーマンスが重要である。

以上のようにまとめられるシュスターマンの身体感性論の三つの次元のうち、第一の次元は、身体に関する存在論や認識論、さらには社会学的研究などを意味するものであり、いわゆる身体論と重なる。また、第二の次元は、広く身体訓練法と呼ばれるものについての包括的研究である。この二つの次元は、筆者がまとめた「身体論の射程」²⁾と共通の論点から理解可能なものである。問題は、第三の実践的次元である。これは、実践についての言説としての理論ではなく、まさに実践そのものを意味しており、シュスターマンの改良主義ならびに哲学のプラグマティックな相の具体化と結び付いている。

この第三の次元の異質性は、例えば、aesthetic という語の意味を考えたときに見えてくる。aesthetic には、「美的 (あるいは感性的)」という対象の特性を表示する意味と、「美学的 (あるいは感性論的)」という理論の相を表示する意味との二つが含まれているのである。日本語では「美的」と「美学的」は、表記上、明確に区別される。しかし、aesthetic は、一つの表記で多様なコンテキストを指示しうるのだ。逆に言えば、aesthetic の新たな用語法によって、従来のコンテキストを組み替える、あるいは混乱させることの可能性が生まれる。シュスターマンが言う身体感性論の基本的次元、特に第三の次元は、その可能性の提示の一例と考えることができるだろう。

そうすると、特に第三の次元に関して、「身体感性論」と言ってしまうのは適切ではないのかもしれない。

それはいわゆる「論」ではないのである。このような事情は、philosophy という言葉にも付いて回る。例えば、philosophy of body を「身体哲学」と訳して理解しようとしたとき、それは「哲学」という学問分野に必然的に組み込まれる。仮に、それが哲学という学問分野とは関係がないものを指示する場合、philosophy of living が「処世術」と訳されるように、「哲学」という言葉を使わなければよい。しかし、philosophy of body はこの後者の事例とは異なり、むしろ哲学という学問の新たな相を生成することを意図している。そして、その philosophy は、philosophy of body であるがゆえに、身体に関わるさまざまな実践を含んでいる。とすれば、その philosophy of body の訳語は「身体哲学」では不適切で、むしろ「身体の知」とでも言うしかない。そして、その「知」の中に、伝統的な学問に通じるような理論のレベルから、具体的経験すなわち実践によって獲得される経験の知のレベルまで、さまざまな次元が存在している。このような状況がシュスターマンの somaesthetics にはあるのだ。この意味で、somaesthetics は、「身体感性に関する知」とでも言うべきものである。

III. 実践的身体感性論の教育的価値

シュスターマンは、分析的な身体感性論とプラグマティックな身体感性論にも何らかの教育的価値を見出すことができると述べるが、この論文では、実践的身体感性論の教育的価値に限定して論じている。

先に指摘したように、ここで問題にされているものは、「身体感性に関する知」の実践的なレベルのことである。その教育的価値を言うために、シュスターマンはプラトンやルソーを援用する。いわく、強健な身体を育成することは、感覚と精神の機能を高め、教育にとって有用である。あるいは、考えることを学ぶために、手足を鍛え、感覚や器官を磨かなければならない。それらは知性のための道具だから。こうした言い方は、まことに陳腐である。しかしながら、シュスターマンは、身体感性に関する知のための実践を、機械的な運動の反復で身体を鍛えようとする従来の体育とは区別し、その陳腐な物言いを別の方向へと差し向ける。そこで強調されるのは、アイステーシス、まさに身体の「感覚」であり、それは、われわれの感覚的受容の自己反省的な気づきの問題なのである。

そのような実践の教育的価値は正しく認められていないとシュスターマンは述べ、身体感性論への批判の一例としてカントを挙げる。シュスターマンによれば、身体的経験の反省、すなわち感覚に耳を傾けることは、

他者との関係を切断し、精神にとって有害だとカントは述べるという。また、自分を振り返るという内観は、身体を弱体化し、動物的機能から身体を逸らせてしまうのであり、経験的な身体的反省は、精神にも身体にも有害だというのがカントの主張だという。そして、シュスターマンはカントを批判する。

通常、われわれの注意は、われわれを取り巻く世界にある外的な対象物に向けられるのであって、内的な感覚にではない。その点で、カントは正しいとシュスターマンは言う。しかし、われわれの注意がまずは外界に向けられなければならないとしても、それは、自己の感覚に注意することが全く無意味だということにはならない。要するに、身体感性に関する知について十分に考慮がなされていないこと、それがカントに対するシュスターマンの批判の要点である。

経験的な身体感性の知が身体の気づきを鋭くし、われわれの感覚の用い方を改めて教育するあり方について、シュスターマンは3点指摘する。

- (1) 経験的な身体感性の知は、われわれの感情や情緒を第一にわれわれに知らせるのであり、それによって、われわれは感情や情緒をより良く制御することができる。例えば、読書の問題。読書においても、身体のこわばりは書物の理解を妨げる。身体感性の知の訓練は、それを未然に防ぐことができる³⁾。
- (2) 経験的な身体感性の知による気づきは、われわれの感情の制御を可能にするだけでなく、われわれの運動や行為をもより良いものへとする。各種のスポーツ運動や楽器演奏にこのことは適用できるのであり、要するに、不必要な筋緊張への気づきが動きを変えるのである。
- (3) 経験的な身体感性の知は、感情と運動の習慣、ならびにその感情と運動が関係する行為の習慣を改良する。例えば、外国人を拒否しようとする感情などは、合理的な意志を単純に強化することで変えることができるわけではない。というのは、習慣的な悪の感情や行為は、合理的な制御を越えた習慣的な身体的反応に依拠しているからである。そのような身体感覚を身体感性的な気づきによって明らかにすることによってのみ、それらの感情や行為を制御することができる。自分に自信を持つといったことも、この身体感性の知と関係している。

要するに、感情や情緒を制御し、運動や行為を制御し、さらに習慣の再構成にも重要な役割を果たすこと、それが、シュスターマンの考える実践的身体感性論の教育的価値である。そして、シュスターマンは付け加える。いかに学びが制度化されてしまったとはいえ、

われわれは具体的な全人的存在として教育される。われわれの感情、思考、行動のすべてに身体的次元があるのであり、その身体的側面から、情緒、態度、行為の教育をより良く扱うことができるのである。シュスターマンのこの確信の背後には、フェルデンクライス・メソッドの、自分自身の実践経験があることを見逃してはならない⁴⁾。

IV. 身体感性の訓練と教育カリキュラム

シュスターマンは、論文の最後の節で、実践的な身体感性の訓練を、小学校から大学までの教育カリキュラムに、どのように効果的に取り入れられるだろうかと問う。良くわからないというのが、とりあえずの彼の答えである。先に見たように、身体感性論が哲学の基本意図と合致すると見ることができるとしても、それが通常の哲学教育のカリキュラムに入ってくるとは思われぬ、というのがシュスターマンの偽らざる気持ちである。彼は、自らの実践として、大学での自分の哲学のクラスで身体感性論を教えたことがあるという。しかし、それは理論として取り上げるに留まらざるを得ず、十分なものではなかった。

シュスターマンは、彼の経歴からして、哲学という学問を専門とする哲学者である。したがって、「身体感性論と教育」というテーマを具体的に考える際、まずは自分の専門領域における教育、すなわち哲学教育、それも大学におけるそのことが念頭に浮かぶことになる。大学における教養教育としてであれ、あるいは文学部などにおける専門教育としてであれ、自己を理解し、自己をより良いものへと差し向けるための身体感性の訓練が、「哲学」という名称の授業でなされるとしたら、それは簡単には受け入れられないだろう。ラディカルな実践である。

そのラディカルな実践を正当化するために、シュスターマンは、身体感性訓練の意義を実証しようとする。その実証のもとになるデータは、結局は、ヨガ、アレクサンダー・テクニク、フェルデンクライス・メソッド、さらには気功などのさまざまな身体訓練法における自らの実感、シュスターマンの場合、フェルデンクライス・メソッドにおけるプラクティショナーとしての経験と、それらの多くの身体訓練法が東洋西洋を問わず歴史の中に生き続けている力に求められる。しかしながら、そのような身体訓練法を実践することを「哲学」という学問と結び付けることは、決して自明の妥当性を得るものではない。シュスターマンのラディカルさは、まさにこの点にこそあると見るべきだろう。哲学とは何かを、最も深いところで、或る意味では最

も野性的な形で、問題化しようとこだわり続けているのである。

筆者は、シュスターマンに、なぜそのような問いを抱え込むことになったのかという、掘り所のない質問を投げかけたことがある⁵⁾。その質問に答えようとする中で、シュスターマンは、自分の人生の一コマを振り返った。例えば、イスラエルで兵役に就いたときの経験や、ダンサーの身体技法に強烈な印象を持ったことなどが、引き合いに出された。それらの経験の中で、自己=身体を自己の内部で対象化する可能性と不可能性に気づいてしまったのだと、彼は言う。

シュスターマンは、身体感性論と教育というテーマに即して、その可能性を「体育」という教育に探ってみようともしている。確かに、体育の授業では身体運動の訓練がなされるのであり、そこに身体感性に関する知が展開する可能性があると言えるかもしれない。しかし、シュスターマンにとって、それは否定的である。これまでの体育の教授法では、運動の指導において主体の関与を減じる方向にある、とシュスターマンは見ている。限られた時間の中でのスポーツ運動の練習をその主要な教材としている現行の体育については、一般的に、そのように言うことができるだろう。しかし、最近の日本で、「体ほぐし」といった自己の身体への気づきの実践が取り入れられる方向性は、シュスターマンの身体感性論と結び付けられる可能性を有しているだろう。それが仮に現実化するとき、それは単に体育という教育の変容を意味するのではない。「体育という教育」と「哲学」という、大きな隔たりを持って表象されてきた二つの極点に架橋が施される、これまたラディカルな事態を示唆することにもなるのである。

V. 学習論の視点から

シュスターマンの「身体感性論と教育」を見てきた。この論文の最後で、シュスターマンは哲学のホリスティック研究に言及し、単なる言語的な方法によってうまく学ばれない身体感性論の経験的実践を通して、重要なことが学ばれるのではないかと述べている。この思いは、例えば、「どんな知識も学び手の身体的な活動に具体化され、学び手の経験のなかに織りこまれることなしには、「学び」としての意義をもちえないだろう⁶⁾」という佐藤学の見識につながるだろう。佐藤は「学びの身体技法」を考える。あるいは、言葉は身体で覚えるものであることを強調する三浦雅士の発言にも、共通点を見出すことができる。「知識とは頭脳の領分である。現代人はそう思い込んでいる。だ

が、知識には、身につけなければならないものもあるのであり、たいいていはそのほうがはるかに重要なのだ。たとえば言葉がそうである。文明の基盤、文化の基盤である言葉がそうなのだ。理屈で言葉を習得した人間はいない。全身で習ったのである。身体で覚えたのだ。だからこそ、表情や仕草も同時に身についたのである」⁷⁾。

さらに、竹内敏晴の言う「からだが語ることば」。「からだはいつも呼びかけている。人は生活の中で、自分で気づかずに、さまざまなしぐさによって、自分のいる状況と自分の生きようと欲する方向のしるしを現している」⁸⁾。この基本認識から生まれるさまざまな学びについての語り。それもまた、シュスターマンの「身体感性論と教育」を支える思想と接続可能であろう。そして、「ホリスティック」という用語が引き合いに出されれば、吉田敦彦の『ホリスティック教育論』⁹⁾とのつながりも見出すことができるだろう。

それでは、学習論として見た「身体感性論」の意義と可能性をどのようにまとめることができるだろうか。第一に、身体感性論の理論的背景であるプラグマティズムの再考の問題を挙げることができるだろう。普遍的な真理といった観念を想定しないプラグマティズム思想にとって、対話的コミュニケーションをその核とする教育という事象は格好の考察対象である。教育が語られ、実践され、その効果が問題にされる具体的な現実が、現実そのものの良し悪しを単純に問うてしまう素朴な教育論においてではなく、むしろ、その教育現実を生み出すコンテキストを明らかにする考察によって、新たな問題のフィールドに導かれるだろう。それは、多かれ少なかれ、教育批判あるいは教育学批判を内包しており、一つの視点として、学習論の展開を促す。デューイの経験概念を越え、自己内観的な側面も含んだ構成主義的学習論も構想されるだろう。

第二に、古くから存在する「理論と実践」の問題に対する新しい枠組みの提示の可能性である。これは、まずはプラグマティズムの科学論・学問論的側面から帰結する。普遍的な真理を与える理論の枠組みはありえないのであるから、理論と称される企てのまなざしは直接的に実践に向かうことになる。対象としての実践の取り上げ方や論じ方は、実践の現実には即して多様でありうる。哲学、美学、教育学といった既成の学問の枠組みは容易に越えられてしまう。さらに、理論の姿の変容のみならず、理論と合体してしまう実践、あるいは理論を飲み込み、包み込んでしまう実践。しかしながら、このラディカルな理論・実践関係は、全く未知の可能性でしかない。

そして、第三に、身体感性論のもたらす可能性の一

つとして、精神と身体という二元論的図式の再検討がある。すでにさまざまな領域で論じられているように精神と身体が密接な関係にあることを言うだけではなく、精神と身体を一体化させ、両者の調和を価値と考えてしまう見方の系譜学的批判も、それは含んでいる。さらに、暗黙的・潜在的に精神と身体二分法を下敷きにしている学校文化を批判し、学習論の視点から人間の生き方(=学び)を問題にする手がかりを与えることにもなるだろう。知識の教科と考えられているものと、技能の教科と考えられているものが、身体感性論の視点のもとで実践的に融合する可能性があるのである。それは、また、知のあり方の反省も導く。経験知や身体知といった知の姿が、これまでの文化の政治学を脱構築することにつながるだろう。シュスターマンが、身体感性論の実践として、人間の身体の中で重量の大きな頭部の特性と重力という自然の力を生かして、合理的に椅子から立ち上がる方法を学生たちの前に示してみせるとき、これまでの教育や学問のあり方とは明らかに異なる状況の中にすでにわれわれはいることを、実感せざるを得ないのである¹⁰⁾。

【註】

- 1) Shusterman, R. "Somaesthetics and Education" 『広島大学大学院教育学研究科紀要第一部(学習開発関連領域)』第51号, 2002年, 17-24頁。
- 2) 樋口聡「現代学習論における身体の地平:問題の素描」『広島大学教育学部紀要第一部(教育学)』第46号, 1997年, 277-285頁。
- 3) プラトンを引き合いに出して、シュスターマンは、「肩がこっていたり胸郭がこわばっていたりすれば、後方も振り向くこともままならず、自分が置かれている世界について良く知ることまでできないだろう」と言う。ここでは、明らかにプラトンの「向け変えの技術」としての教育(『国家』)が意識されているだろう。確かに肩こりで首が回らなければ話にならないのではあるが、こうした発言はやはりわれわれを戸惑わせる。
- 4) 『フェルデンクライス身体訓練法』(大和書房, 1982年)の訳者、安井武は、同書の「訳者あとがき(241-251頁)」で次のように述べている。要約してまとめてみよう。

欧米で注目を集めているフェルデンクライス・メソッドは、からだところをひとつのものとしてとらえ、ひとの内部に眠っている能力を目覚めさせるユニークな方法である。外見的には単純なからだの

動きをくりかえすだけのものだが、単なる肉体訓練や体操の類ではない。動きによってからだの感覚を呼び起こし、それを深めることによって意識を拡大し、からだの機能を有機的に再統合し、身体的にも精神的にも人間活動を活性化する。

からだを動かすことがこのメソッドの第一の特徴であるが、その動きは体操やスポーツなどで近代的な訓練法として考えられている動きとは完全に異なる。筋肉を鍛えるという考え方が否定されている。また、そのアンチ・テーゼとして提唱されているリラクゼーションを目的としたものをも超えている。痛みや苦しさをこらえてがんばる、無理をするというやりかたではなく、ある動きが「できる」か「できない」かにこだわる気持ちを完全に捨て去ったとき、自分で思っていたよりもはるかに、おどろくべき自由な動きができるようになる。がんばることをやめたとき、習慣的な緊張と多年の習性から解放された自分固有のからだの行動を発見することになる。

このメソッドは、ヨーガ、禅、太極拳、自律訓練法、野口体操、バイオフィードバックその他の心身訓練法とも原理的には相通するものがあるが、実際の単純明快さと神秘性のなさでは抜きん出ている。

また、現在、日本にもフェルデンクライス協会があり、その協会理事のかさみ康子のホームページには以下のような記述がある。

(<http://www.asahi-net.or.jp/~ge9y-love/index.html>)

フェルデンクライスメソッドには、個人レッスン (Functional Integration: FI 機能の統合) とグループレッスン (Awareness through Movement: ATM 動きを通しての気づき) のふたつのやり方があります。

フェルデンクライスメソッドは身体教育 (somatic education) のひとつの非常にユニークな方法であり、治療やカウンセリングではありません。

ふたつの方法のどちらの場合も、ゆるやかな動きを使い、クライアント (または生徒) の注意を「動き」へと導いていきます。そして、不必要な緊張のない効率の良い動きを回復し、身体運動全体を改善し、そのひとの機能性を向上させます。このメソッドを行うことによって、私たちは、動きをよりたやすしいものとし、動きの範囲を広げ、動きの柔軟性と協調性を増し、本来持っている優雅で無駄のない動きを行う能力を再発見することができます。そして、このような「動き」の改善が、私たちの人生

の他の側面における機能性の向上へと広がっていくのです。

フェルデンクライスメソッドは、物理学と生体力学の原理、そして、学習と人間の能力向上についての経験からの理解に基づいています。気づき (awareness) の働いていない身体の部分へと注意を向けるような一連の動きをとおして、自己イメージが向上されます。それによってこのメソッドは、私たちがもっと十分に身体運動の機能に自分自身を生かすことを可能にしてくれるのです。レッスンによって、習慣的な神経や筋肉の働きがいかにパターン化し硬直化しているかに気づき、新しい動き方を選びとれるようになります。感じとる能力を高めることによって、フェルデンクライスメソッドは、私たちの生き方をより充実した、快適なものとする助けとなるのです。

また、身体機能の改善は、必ずしもそれ自体を目的としているものではありません。それは、周囲の環境や人生との関わりにおける私たちのより広い意味での向上への入り口なのです。

シュスターマンは、このフェルデンクライス・メソッドの真摯な実践家である。

- 5) 広島大学での研究会 (2002年7月20日) で、シュスターマンが“Pragmatist Aesthetics and Asian Thought”というレクチャーを行なった際の質疑応答にて。シュスターマンは、2002年7月1日から2003年6月30日まで、広島大学大学院教育学研究科・学習開発学講座の客員教授として、広島大学に滞在している。
- 6) 佐藤学『学びの身体技法』太郎次郎社、1997年、19頁。
- 7) 三浦雅士『考える身体』NTT出版、1999年、75頁。
- 8) 竹内敏晴『思想する「からだ」』晶文社、2001年、16-17頁。
- 9) 吉田敦彦『ホリスティック教育論：日本の動向と思想の地平』日本評論社、1999年。
- 10) シュスターマンには以下のように多くの著作があり、国際的に注目を集める哲学者の一人である。*The Object of Literary Criticism* (Konigshausen & Neumann, 1984).
T. S. Eliot and the Philosophy of Criticism (Columbia Univ. Press, 1988).
Analytic Aesthetics (Blackwell, 1989). (編著)
The Interpretive Turn: Philosophy, Science, Culture (Cornell Univ. Press, 1991). (編著)

L'art a l'etat vif: La pensee pragmatiste et l'esthetique populaire (Editions de Minuit, 1991).

Pragmatist Aesthetics: Living Beauty, Rethinking Art (Blackwell, 1992).

(秋庭史典訳『ポピュラー芸術の美学—プラグマティズムの立場から—』勁草書房, 1999年。)

Practicing Philosophy: Pragmatism and the Philosophical Life (Routledge, 1997).

Bourdieu: A Critical Reader (Blackwell, 1999). (編著)

Interpretation, Relativism, and the Metaphysics of Culture: Themes in the Philosophy of Joseph Margolis (Humanity Books, 1999). (編著)

Pragmatist Aesthetics, 2nd.ed. (Rowman & Littlefield, 2000).

Performing Live: Aesthetic Alternatives for the Ends of Art (Cornell Univ. Press, 2000).

Vivre la philosophie: pragmatisme et art de vivre (Klincksieck, 2001).

Surface and Depth: Dialectics of Criticism and Culture (Cornell University Press, 2002).

シュスターマンの著作は、ヨーロッパ言語のみならず、中国語や韓国語にも続々と翻訳されつつあるが、現在のところ、著作の邦訳は『ポピュラー芸術の美学』だけである。この訳書のこともあって、日本では美学の領域で有名であるが、本人と話してみると、正直のところ、いわゆる美学にはあまり関心がなく、むしろ自分のテーマは哲学だと考えているとのことである。2002年10月12~14日に広島大学で開催の第53回美学学会全国大会でシュスターマンの講演が企画された。当初、シュスターマンは、本稿で取り上げられた somaesthetics について話をするを考えていた。それが、現在の彼の最も関心を寄せるテーマだからである。しかし、日本の美学会の状況等について筆者と話をする中で、結局、彼のレクチャーのテーマは「美学的問題としての娯楽」に変更された。また、シュスターマンは、2001年8月に日本で開催された国際美学会議に参加することになっており、日本の美学者からも大きな期待を寄せられていたが、彼は参加することができなかった。その理由は、フェルデンクライス・メソッドの重要な講習会と国際美学会議の日程が重なってしまったからであった。これらのエピソードからも、いかに彼にとってフェルデンクライス・メソッドが大きな位置を占めているかがわかる。